

観光都市としての横浜

1. ぐさの広場
2. 島の森パーク
3. 赤レンガ倉庫
4. 大さん橋
5. 山下公園
6. 横浜スタジアム
7. 横浜ランドマークタワー
8. 横浜中華街
9. 元町商店街
10. BankART
11. みなとみらい線

横浜に点在する観光資源

横浜は、交易・交流の場であり、日本の「玄関」門」として考えられてきました。1960年代から、公園や商店街などの魅力的な都市作りのハード整備が行われ、2000年代からは、ハードと文化芸術などのソフトを統合する創造都市政策が進み、臨海部を中心に横浜の顔をつくる創造的領域が創出されてきました。横浜市の長年の取り組みにより、市内には多くの観光資源がたくざんあります。

敷地は、山下公園に面した一角にあります。みなとみらい線や首都高速、国際港が付近にあるアクセスのよい場所、近くに市街地があります。今回提案するメディアポートは、横浜の「玄関」としてのシンボルであり、横浜の魅力あるコトモノを繋げる「門」となる建築です。

メディアポートの主な役割 物理空間を繋げるメディア

メディアポートは、アーカイブされた資料データをもとにした横浜観光案内所、電子図書館とコミュニティスペースを複合した公共施設で、メディアを媒介として人と人、人と人をつなげる建築です。観光案内センターでは、観光客が横浜に関する資料を無料で閲覧し横浜の魅力あるスポットを探ることができます。電子図書館では、書架の無い空間のほとんどは交流スペースや読書スペースに割り当てられており、本を読む、休憩する、会議する等の用途で利用できます。旅行者と地域の人が集える公共空間の提供が、観光都市としての横浜に必要な施設だと考えました。

情報の門

門のフレームはLEDライトで構成されていて、イベント告知や広告、アーティストの制作した映像などを映し出します。門のスクリーンは (1) 建築に新しい表情を映し出す要素であり、(2) 来館客に未知の情報をレコメンドするメディアであり、(3) 経済・産業を循環させる機能を持ちます。

電子図書

アメリカの電子化は、欧米で比較的進んでいます。例えば、アメリカでは95%の公立図書館が電子図書サービスを提供している一方、日本で電子図書を提供しているのは公立図書館は、20館ほどです。電子図書には、(1) 保存性 (2) 検索容易性 (3) 空間の節約 (4) 貸出業務のシステム化 (5) 書籍の軽量化などのメリットがあります。日本で電子書籍が普及しないのは、出版業者との権利関係の調整による所が大きいようです。メディアポートでは、one user, one licence方式を採用し、権利に関する利害関係の調整を図っています。

運営モデル

よこはまメディアポートは経済的に自立すると同時に横浜周辺の産業活性化を果たす公共施設を目指しています。観光客の動員を源にした企業広告を中心とした収益を得ることで、利用者に質の高いサービスを無料で提供します。

① One User One License Model
電子書籍コンテンツの運用方法のひとつで、出版社から購入する1つのライセンスにつき、一度に入館に電子書籍を貸し出せるよう利用を制限する方式。出版社との権利など利害関係に配慮したモデル。

② 情報へのアクセス
メディアポートのアーカイブされた情報には、施設内のタブレット、デスクトップ、PCstation等からアクセスできる。地域の人が電子図書を借りる時や、観光客が旅行のためのガイドを必要とする場合、データのインプットされたガイド端末を貸し出す。

よこはまメディアポート - 連なる門の情報空間 -

メディアポートは、街へ開かれた情報空間の門です。ここでは、横浜に関するあらゆる情報が集まり、旅行者の観光をサポートします。

また、ここは境界を生み出す出会いの門（かど）でもあります。電子書籍図書館という公共空間は、観光客、地域の人、そして観光客と地域の人それぞれのコミュニティを育みつなげる場となります。



デザインコンセプト「連なる門」

横浜の玄関口としての性格、横浜への案内所としての機能、様々な情報へアクセスする場所というコンテキストから、「門」という記号をデザインコンセプトとしました。これを平面・立面方向に連続させて門のファサードを作ります。

「門」がずれながら重層によって隙間（ヴォイド）が生まれる空間構成は、(1) 光を内部に取り込み、(2) 門の外側への眺望を得ることができます。全体は切れ目の無くなるプログラムは、(3) 未知数の来館客に対応するフレキシビリティを得ることができます。

ゾーニング計画

下層部ほど人と人のコミュニケーションの多いもの、上層部ほど静かなコンテンツを配置しました。動線は渦巻型に徐々に上層へ上がっていくようになっており、この渦巻動線によって本を読む空間が随所に配置しています。来場者は建物の中を探索するように歩き回り、居心地のいい空間を探ることができます。建物内部は切れ目のないプログラムによってつながっており、例えば、電子図書館の受付からリビングまでの大空間をまるごと使ってパーティやワークショップを行うといった様々な用途に対応できるフレキシビリティを持ちます。

構成ダイアグラム

箱型のスチールフレームを重ね、E/Vや階段を含むコア施設を貫入。

hlc00102